６. 課題研究関係の発表会概要

平成30年度　SGH 課題研究中間発表会

〈特色〉

２年次の課題研究で、SGH 関連講座である６講座（月曜３講座、木曜３講座）を選択している生徒たちが日頃の探究活動の到達点を社会系・理系講座は日本語、英語系講座は英語で発表した。

〈実施日時・場所〉

平成３０年１０月２７日（土）　９：００～　本校六稜会館３階ホール

〈内容〉

講座の中でいくつかのグループに分かれている場合もあり、グループごとに以下のようなテーマで発表した。

社会系１　（ベトナムを観光大国へ）
社会系２　（インドネシアで五輪開催を）
社会系３　（“大国の脅威に屈しない”ラオス 発展のために）
理　系１　（パスタブリッジ）
理　系２　（快適な建築 ）
英語系１　（Give Myanmar the New Education）
英語系２　（Tourist Trade of East Timor）
以上月曜講座

英語系３　（Comparing Islamic culture with Japanese culture）
英語系４　（東南アジアに学ぶ授業中の眠気対策）
理　系３　（絵画と天文学）
社会系４　（東南アジアから学ぶ日本の教育）
社会系５　（マレーシアの政策から考える南アフリカの格差是正に向けた政策）
社会系６　（日本におけるカジノの成功のために）
以上木曜講座

発表の約１週間前には体育大会、発表の２日後からは修学旅行という過密な日程の中で生徒たちは発表準備のために大いに努力した。おかげで指導・助言担当の先生方からは「過去の年度と比較してプレゼンテーション力が向上している。」という言葉をいただいた。また、生徒の発表に対して指導・助言者の先生方だけでなく他の生徒からも質問が発せられ、それらの質問に誠意を持って答えようとする発表者の態度も「好感が持てる」との評価を得た。

〈成果と課題〉

発表会に出席された来賓や運営指導委員、指導・助言者の先生方からいただいた講評

の要旨は次の通りである。

岡部美香　様（大阪府教育委員会教育委員）

・自分の意見を述べるだけでなく、反対されたとき相手をどう説得するかを考えよう。一種のリスクマネジメント。カジノ班だけそれができていた。
・先行研究を読もう。
・質疑応答は非常によかった。さすが。

松下信之　様（大阪府教育庁高等学校課主任指導主事）

・質疑応答がよかった。北野生同士がいい質問をし、それに感情的ならずによく答えていた。こういう雰囲気は初めて。
・研究を進める中で、物事を見るときの視点、見方を身に付けてほしい。社会や現実に正対して。すぐに答えを出そうとせず、逃げずに。

山本雅弘　様（株式会社毎日放送相談役最高顧問）

・発表力は格段の成長。
・ただ、テーマへのアプローチの仕方に多面性が足りない。その点が物足りない。

野村正朗　様（学校法人帝塚山学院理事長）

・すべてのクラスで課題研究をしていることが素晴らしい。
・大人から見て答えが分かってしまう研究が多い印象。高校生ならもっと身近なことに焦点を当て異なる切り口で探ってほしい。
・ネットに頼らずリアルな経験で。それが無理ならスカイプで。

堀内貴臣　様（大阪府教育センター指導主事）

・スライドの様々な工夫が素晴らしい。
・以下の点に留意してほしい。
　疑っているか。
　データや情報は最新か？　前提は正確か？
　聞いている人に自分が伝えたいことを絞り込むこと。いかに印象付けられるかがポイントだから。
　そして、最も大事なこと、楽しんでいるかどうか。

岡本正明　様（京都大学東南アジア地域研究研究所教授）

・SGH 最終年度、東南アジアから学ぶという研究が出てきたことは画期的。
・その分、データ収集が大変である。２年前のデータはすでに使えない。
・そうなると訳されたものではなく英語で資料を読むこと、現場で話を聞き自分で確かめることがより重要になる。

西　芳実　様（京都大学東南アジア地域研究研究所准教授）

・発表の仕方、PPT の使い方は大きく成長した。
・現状がそうなっているには必ず理由があることを意識して。よいところもダメなところもあって理由があってそうなっている。なぜそうなっているのか、を考えるところ

からすべてが始まる。悪い点を暴きだし、悪いからダメ、だけでは何も解決しない。

梶本興亜　様（京都大学名誉教授）

・SGH を初めて見た。SSH は深く追求することが前提。その点、社会科学は難しいなと実感した。
・大きくテーマを立てて、結論がしょぼしょぼになっている印象。
・調べたことについて議論が足りない。後半はもっとよく討論して。

吉野英知　様（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社シニアコンサルタント）

・発表力、プレゼンテーション力は上がっている。
・大きな論点に結論が小さい。網羅的解決は無理。もっと絞れ！
・まだまだ自分たちで調べましたと、いう水準。調べたことを誰に伝えたいのか、実際に誰に動いてほしいのか考えてほしい。
・答えのないことにどうチャレンジするか。一つは徹底的にリサーチすること。
・調べ方が足りない。
・データの比較について、前提の異なるものをそもそも比較しないように。
・言葉の使い方が乱暴。使う言葉はきちんと定義して。例えば、教育、システム、積極的に・・、何を持って、その言葉を使っているのかが分からない。

信川久実子　様（奈良女子大学特別研究員）

・先週は体育大会、明後日からは修学旅行、その間の課題研究。生徒の皆さんはとても忙しい中よく頑張った。
・より高いレベルに向かうために、時間の使い方も考えてください。

いただいた講評からは、大きなテーマを設定した次の段階としてアプローチすべき具体的なテーマを設定する際の見通しや方法論、比較研究を行う上での条件設定の不十分さや情報収集の方法など、今後の探究活動を進めていく上での課題も明らかになった。この点については、課題研究の講座を担当する教員スタッフの課題でもあるという認識を持ち、来年２月に行われる最終発表会に向けて生徒各グループへの支援を継続する必要性を痛感している。

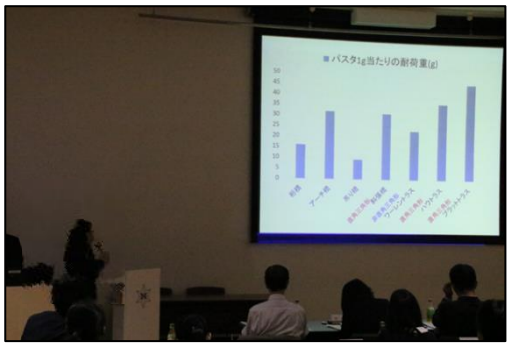
また今回の発表会では、昨年度と同様に評価シート（ルーブリック）を用いて各グループの発表内容を採点した。その結果をもとに、中間発表会の後に開催された北野高等学校ＳＧＨ運営指導委員会の場において協議し、以下の４グループをそれぞれ外部で行われる大会や発表会に本校代表として派遣することに決定した。

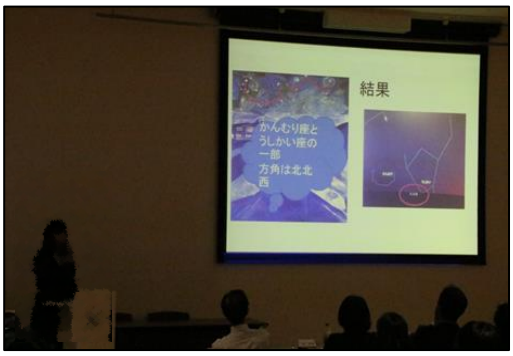
①SGH 全国高校生フォーラム（３０年１２月１５日・東京）
　ポスター発表、英語で説明
→　英語系４（東南アジアに学ぶ授業中の眠気対策）

②SGH 甲子園（３１年３月２３日・関西学院大学）
　口頭発表またはポスター発表　英語または日本語
→　社会系３（“大国の脅威に屈しない”ラオス 発展のために）

③大阪教育大学附属高校平野校舎の発表会（３１年１月１２日）
　口頭発表　日本語
→　社会系２（インドネシアで五輪開催を）

④GLHS　１０校合同発表会（３１年２月９日・大阪大学豊中キャンパス）
　口頭発表　日本語
→　理系３　(絵画と天文学)





スーパーグローバルハイスクール（SGH）全国高校生フォーラム

〈特色〉

昨年度から、それまで年末に開催されていた SGH 連絡協議会・協議会に代えて開催されるようになった催しである。昨年度の会場はパシフィコ横浜であったが、今年度は東京国際フォーラムで行われ、全国の SGH 指定校・アソシエイト校および東京都内の高校がポスターを使って各々の研究成果を英語で発表した。

〈実施日時〉

平成３０年１２月１５日（土）　１０：００～１７：００

〈内容〉　（北野高等学校ＨＰ・付添教員によるレポートより）

本校から参加した生徒２名は、ヤードムというタイで使われている暑さ対策製品が眠気覚ましにも効果があるということで、これを日本の高校生に普及できないかというテーマについて英語で発表した。

午前中はテーマごとの交流会に参加した。本校は教育・文化・歴史・言語・芸術のテーマの交流会に参加した。他の参加生徒と交流し、とても良い刺激を受けたようだ。

午後はポスター発表。発表４分、質疑応答４分の計８分のプレゼンテーションを２回行った。多くの方が聴きにきてくださった。学校で練習していたときは４分の発表時間に収まらず苦労を重ねたが、当日はしっかりと時間内にまとめることができた。効果的かつわかりやすくポスターを用い発表できた。また、英語での質疑応答に堂々と答えることができていた。

〈成果〉

残念ながら表彰は受けることができなかったが、参加した２名にとってはとても良い経験になったようだ。この機会を活かして最終発表に向けて研究をすすめていきたいと思う。

大阪教育大学附属高等学校平野校舎　SGH 課題研究発表会への参加

〈特色〉

平成２７年度に SGH に指定された大阪教育大学附属高等学校平野校舎は、「多面的に“いのち”を考えるグローバルリーダーの育成」をテーマに研究開発に取り組んでいる。北野高等学校は昨年度より、SGH 課題研究発表会に招待校として参加し、課題研究に取り組んでいる２年生が口頭発表をしている。

〈実施日時〉

平成３１年　１月１２日（土）　１２：３０～１６：００〈第２部〉に出場

〈内容〉

本校から参加した生徒６名は、「世界一のイスラム人口と東南アジア一の GDP を有するインドネシア。今年はアジア大会、アジアパラ大会を開催し国際的な信頼を高めた。そんな中、アジア大会を開催したことで、インドネシアでの五輪開催の機運が一気に高まっている。インドネシアは国是として、多様性の中の統一を掲げている。これは″いかなる差別をも伴うことなく（中略）スポーツを通して（中略）平和でよりよい世界をつくる″とした五輪憲章とも合致する。そこで私たちは五輪開催に向けて障壁とも成りうるインドネシア国内の課題を洗い出し、解決策を模索する」という要旨で体育館の舞台上で約１０分間の口頭発表を行った。

質疑応答の場面では、附属高等学校の生徒からインドネシアでの五輪開催を企画した理由や高校生としてどのようなことに貢献できるか、大会運営上の問題点は？などの具体的な質問が発せられた。また、発表会終了後には附属高等学校の体育科教員から、「五輪開催は開催国にスポーツを普及するという大きな意義がある」というアドバイスを受けていた。報告者は地歴・公民科の教員であるが、このアドバイスを横で聴いていて、社会的なテーマを扱う課題研究であっても担当する教員の教科の枠組を越えて広げることができる可能性に思い至った。

〈成果〉

発表会の直後に生徒に書いてもらった振り返りシートからは、反省すべき点と、最終発表会に向けての改善方向がうかがえる記述が見られる。

《自分たちの発表を終えて気付いた点》

・自分が思っているよりもゆっくり話さないと、早口になってしまうこともあると気付いたので、次からは相手が聞き取りやすいように話そうと思う。

《他校のポスター発表や口頭発表で参考になりそうな点》

・大教大のプレゼンテーションは根拠や結論がとても信頼できるものだった。私たちのプレゼンテーションは結構表面的で深いところまで追求できていない部分が多かったと反省した。
・調べるまでの過程→実験→考察の流れがしっかりしている

平成30年度　SGH 課題研究最終発表会

〈特色〉

２年生が取り組んだ課題研究の１年間の集大成として行われる。SGH 関連講座も含めた全ての講座を受講している生徒が８つの教室に分かれてオーラル発表、２つのホールでポスター発表を行った。また、発表当日は２年生だけでなく、１年生も全員が参加した。来賓、保護者も見学に来られた。

〈実施日時〉　平成３１年　２月　２日（土）　８：３０～１２：３０

〈内容〉　北野高校 HP の記事より抜粋

課題研究のテーマは様々です。９月の中間発表後に、指摘されたところを修正したグループや、テーマを見直したグループもあった。１２月の後半から最終発表に向けてラストスパートがかかり始めた。連日 LAN 教室でプレゼンテーション資料を作ったり、放課後残って実験や議論を重ねたり、ポスター印刷をしたり、皆が最後まで真剣な面持ちで準備を行った。

その成果が、２月２日に満を持して披露された。オーラル発表は、生徒による司会で進んだ。発表テーマ・発表者の紹介だけではなく、質疑応答や進行時刻の管理までも行う。発表する生徒たちは、周到に用意されたスライドで要領よく発表していく。交代しながら発表し、それが終わると質問に答えていく。発表は練習の甲斐あって、なかなかスムーズだった。思ってもみない質問が飛びだして、しどろもどろになりながらも頑張って答えたり、ウィットにとんだ回答が出たり、盛り上がりのあるオーラル発表だった。

多目的ホールや六稜会館１階では、ポスター発表が行われた。１年間研究した内容を、AO 版１枚にまとめて掲示した。また、指定の時間には各グループの生徒が控えており、質問を受け付けていた。ポスターだけではなく、様々な器具も並べられ、実演を行っているところもあった。オーラル発表よりも近くで話しかけやすく、熱心に話し合う生徒の姿が見られた。

生徒たちは自分が見たテーマについて感想を書き、提出する。お互いをたたえあうものもあれば、厳しい指摘もあった。これも日頃の授業で、他人の発表を聞き、正しく批評する態度が身に付いているからだろう。保護者の方からも多数のご意見をいただいた。

普段の授業とは違って、暗中模索を続けた１０ヶ月間だった。これは生徒たちの成長のためにも有意義な時間だったと思う。見学した１年生は、来年の自分たちの姿を思い浮かべ、気持ちを奮い立たせていることだろう。

〈成果〉

SGH 関連講座の生徒は全ての発表が終わった後六稜会館３階ホールに集合し、それぞれの系列の発表を見てくださった運営指導委員や指導助言者の先生方から講評をいただいた。先生方によるルーブリック表は当該のグループに手渡し、振り返りの材料とした。また SGH 関連講座を受講している生徒名を対象に、５月上旬に行った年度初めアンケートと同じ質問項目で事後アンケートを実施した。アンケートには選択肢で回答する質問以外に自由記述欄も設けており、その記述からは生徒たちの変容の様子がうかがえる。

GLHS 合同発表会

〈実施日・場所〉
　平成３１年　２月　９日（土）午後　大阪大学コンベンションセンター

〈内容〉　（北野高等学校ＨＰ・付添教員によるレポートより）
　本校からは「天文学的側面から見た絵画の正確性」の研究チームが代表としてプレゼンテーションを行った。舞台に上がる直前まで入念にリハーサルを繰り返し、本番では堂々とした発表を披露した。質疑応答の時間には大阪大学の先生からの質問にも臆することなく堂々と受け答えしていた（後で話を聞くと「想定の範囲内の質問でした！」とニッコリしていた)。

　各校からの発表内容は日本社会が抱える問題を扱うもの、心理学や地理学に関するもの、大衆芸能から戦後社会を考察するものなど多岐にわたるテーマで、着眼点や研究手法、プレゼンテーションの技法などは見学した生徒たちにとっても学びの多い充実した一日となったことと思う。

　発表会の後半には本校生徒が司会進行役を務めてくれた。また、発表の最後には１０校合同のアメリカ研修（シリコンバレー等）の参加生徒が寸劇を交えながら研修報告を行った。

〈成果〉
　今回の発表で、アカデミックな観点で高い評価を得た発表に送られる「大阪大学賞」を受賞することができ、ここまで頑張ってきた生徒たちには大きなご褒美となった。